
麻帆良に来たシャーマン

神崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良に来たシャーマン

【Nコード】

N1765S

【作者名】

神崎

【あらすじ】

シャーマンキング、ハオによって異世界に飛ばされた五人の戦士の一人、ホロホロ。彼は一人飛ばされた異世界で何をやらかすのか。

飛ばされたシャーマン（前書き）

やってしまった。ただでさえ更新遅いの新しいやつを投稿してしまいました。ちなみに大学落ちました。浪人だ、ヒヤッハー！まあ、少しは更新スピードを上げたいと思いますのでこれからもよろしく願います。

飛ばされたシャーマン

グレートスピリッツの内部、シャーマンキングである麻倉葉王の説得に成功した葉たち（十祭司を除く）は生き返ることになった。

「それじゃあお前たちを生き返らせるぞ」

「おお、頼んだぞ葉王」

兄弟である葉王と葉が言葉を交わす。ここに来て初めて二人はただの兄弟として話をする事が出来ていた。

「あー、やっと帰れるぜー」

頭の後ろで手を組んだホロホロが気だるげに言った。

「終わってみればあっさりしたもんだっとな」

チヨコラブが気が抜けたような声でそう言った。

「まあ、後味の悪い終わり方よりはいいんじゃない？」

「ま、それもそうか」

リゼルグがそう言い、チヨコラブもそれを肯定した。

「分かんぞ？葉王のことだ。また何か企んでいるかもしれん」

そう言って蓮は葉王を睨み付ける。そして蓮のその考えは当たって

いた。

「無駄話はそこまでだ。今からお前たちを蘇生する」

その言葉と同時にそこにいた多くの人間たちが少しずつ減ってゆく。蘇生されている証拠だろう。そして、最後にこの戦いの最大の功労者である五人の戦士、麻倉葉、道蓮、ホロホロ、チヨコラブ、リゼルグとその持ち霊たちが残された。

「さて、お前たちで最後だ。見せてもらうぞ、お前たちがどんな未来を作るのか」

「ああ、なんとかやってみる」

「…そうか」

そして葉たちは姿を消した。—— たった一組を残して。

「……………あれ？なんで俺まだここにいんだ？」

『クル？』

残されたのは今はホロホロと名乗るアイヌ出身のシャーマン、碓氷ホロケウとその持ち霊、コロポックルのコロロだった。

「ふふっ……………」

葉王がホロホロを見て薄く笑みを浮かべた。

「……………おいハオ、こりゃどういうことだ？」

「なに、お前は散々ボクを馬鹿にしてくれたからな。少しばかり意返返しをしようと思ってるね」

「はあ？」

「安心しろ、持ち霊は付けてやる。——じゃあな」

「あ、おい、ちよつ——！？」

まともな言葉を発することなく、ホロホロはその場から消えた。

「ふふつ、楽しんでこいホロホロ。それでもボクはお前のことが気に入ってるんだ」

グレートスピリッツ内にハオの笑い声が響いた。そして——

「……………ここ、どこだ？」

見知らぬ森の中でホロホロの声が虚しく響いた。

飛ばされたシャーマン（後書き）

ホロホロ大好きです。カッコいいですね。コロコロ可愛いよコロロ。

麻帆良での初戦闘（前書き）

OSはオーバーソウルの略。これはみんなわかるよね？

やはり戦闘描写は苦手だ。文章力がない…orz

これから色々都合主義なところが出てきますが、菩薩のような心で読んでいただけると嬉しいです。

麻帆良での初戦闘

「いつつ……ハ才の野郎、何しやがったんだ？……てか、ここどこだ？」

ホ口ホ口は周りを見渡して呟いた。自分は確か宇宙プラントで死んだはず。なら生き返るのもそこでなければおかしい。しかし周りは木、木、木。木だらけだ。だからといって森のプラントというわけでもないさそうだ。

「コロロ、ここがどこかわかるか？」

クル…

持ち霊であるコロロに聞いても分からない。というかこういう頭を使うことはリゼルグ向きなのだ。ホロホロには向いていない。

「まあ、とりあえず歩くか□□□！」

ツクル！

結局、ホ口ホ口は考えることを止めた。しかし、歩き始めて数分――

「だあああああああ！？ここどこだよチクシヨオオオオオオオ！」

絕賛迷子中。

そもそも森にいた時点で迷子なのだがそこら辺は気にしない。

「ちくしょう、木しかないうえに夜だから余計やりづれえ」

そう、今は夜だ。チョコラブのように鼻が効かないホロホロでは臭いで判断することも出来ない。

「てか葉たちはどこなんだ？近くにいてもおかしくないは？」
「ドンッ！！」………は？」

『クル？』

いきなり聞こえた音と閃光にホロホロとコロロは首を傾げた。もう、シャーマンファイトは終わったはず。戦う理由などない。

「……いや、また蓮とチョコラブが漫才やってんのかも知れねえ。行ってみるかコロロ」

『クルッ！』

そして閃光が見えた場所に向けてホロホロは走り出した。

「くっ……！！龍宮、まだいるのか！？」

「まだだ。どんどん出てきてる」

「応援は来ないのか？！」

「あまり期待は出来ないね」

桜咲刹那と龍宮真名の二人は大量に召喚された鬼や烏族と戦ってい

た。

「斬魔剣!!」

「ぐあああっ!?!」

パンパンパンパンパンパンパン!

『ぬおおおっ!!』

刹那は野太刀の『夕風』、龍宮は拳銃——エアガンを二丁構えて応戦している。敵をどんどん蹴散らしていく二人だが、疲労が溜まらないわけではない。少しずつだが確実に溜まっていく。

「くっ!?! (数が多い!!)」

「刹那、後ろだ!?!」

「遅い、貰った!!」

「っ!?!しまっ——!!」

疲労によってできた僅かな隙に、烏族の一人が刹那に斬りかかった。しかし、烏族の攻撃は刹那に届かなかった。烏族の全身が凍りついていたのである。

「はあ、女二人を寄ってたかって苛めてんじゃねえよ」

声がしたほうに刹那と真名が向くとそこには、OS『オーバーソウル
ニポポテクン
ペ』を装着している少年、ホロホロがいた。

閃光が見えた方に走っていたホロホロは困惑していた。

「どうなってるんだ……？」

光が見えるのはいい。蓮のOSなら光が見えるのはむしろ当然だ。だが問題は別にあつた。

「巫力を感じねえ……」

そう、OSの力の源である巫力を感じないのだ。だとすれば、あの閃光と轟音はOSではないということになる。そしてほどなくしてホロホロは閃光があつた場所に到着した。そこでは、少女が二人と、式神と思われる鬼たちが戦っていた。

「（やっぱり巫力を感じねえ。てかあんなシャーマンいたか？）」

自問自答していたホロホロだったが、鳥のような式神が刀をもった少女に斬りかかろうとしているのを見て、思考を打ち切って行動に移した。

「行くぜコロロー！」

『ツクルー！』

「OS、ニポポテクンペ《ニポポ手甲》！！」

修行のおかげで、ホロホロはOSを発動するのにほとんど時間はかからない。一瞬でを発動したホロホロは、右手のニポポ手甲、『シモンマタク《ライトワイフ》』を少女の後ろの式神に向けた。

「ルプシカテク《凍らせる手》――！」

その技名のとおり、ホロホロは一瞬で式神を凍結させた。そして、二人へと顔を向けた。

「状況は分かんねえが、困ってんだろ？手伝うぜ」

しかし、二人は少し困惑しているようだ。まあ、見知らぬ男がいきなり助太刀だ、なんて言っても怪しいと思うのは当然ではある。

「あなたはいった「危ねえ！」ッ!？」

ホロホロの素性を確かめようとした刹那だが、その隙に鬼が彼女に殴りかかろうとしていた。しかし、ホロホロが間に入り込み、手甲で受け止めたおかげで怪我はなかった。

「話は後だ。今はこいつらを片付けようぜ！」

確かにホロホロの言う通りだ。素性を確かめるにしても、ここを乗り切らなければどうしようもない。それに、相棒である龍宮はすでに戦闘を再開している。刹那だけが戦わないわけにはいかない。

「分かりました。では、そちらはお願いします――！」

「ハッ、任せな――！」

「（……………なんだあれは？）――」

龍宮は後方で刹那とホ口ホ口の支援をしていた。素性も何も分からない少年だが、敵ではないようだ。しかし龍宮にはそんなことより分からないことがあった。

「（何故、魔力も感じない……？）」

そう、少年が使っている……おそらく手甲の類だろう……から魔力や気が一切感じられないのだ。あれほどの冷気を操っていて、魔力も気も使っていないなどあるはずがない。しかも何故か少し透けている。

「（とりあえずこれらを片付けてからか……）」

そう結論付けて龍宮は戦闘に意識を戻した。

「これで最後だ！カウカウプリウエンペ《荒くれ者の雷》！！」

「ぬうあああ！？」

大量の大型の雷を最後の鬼に放ち、還して、戦闘は終了した。

「ふう……とりあえずこれで終わりか？」

腕で額を拭い、ホ口ホ口はOSを解いた。あの程度の敵、十祭司に比べれば雑魚である。

「すみません、あなたのおかげで助かりました」

「私からも礼を言わせてもらっよ」

「気にすんなって。あ、俺の名前はホ口ホ口だ。まあ、よろしくな」
ホ口ホ口はOSの媒介であるイクパスイをポケットに入れながら言う。

「（珍しい名前ですね）私は桜咲刹那です。よろしくお願いします」

「（偽名なのか？）私は龍宮真名だ。早速だがホ口ホ口、少し聞きたいことがある」

「おお、俺も聞きたいことがあるんだ」

会話の末、ホ口ホ口はこの責任者の所に行くことになった。そしてホ口ホ口が二人に連れられて入ったのはバカでかい学校。学校が苦手なホ口ホ口は入るのを少し渋ったが。今は学園長室という場所に向かっている最中である。

「ホ口ホ口さん、先ほどはありがとうございました」

「もういいって。……それにしてもお前のOSって何なんだ？その刀が媒介なんだろう？」

「えっ？……あの、ホ口ホ口さん……OSとは何ですか？」

「はあ………？いや、さっきだって何か雷みたいなの出してたじゃねえか。あれ、OSの技じゃねえのか？」

「いえ、あれは気を用いた技ですが…」

「「????」」

話が噛み合わない。刹那とホ口ホ口は同時に首を傾げた。

「二人とも、その話は学園長室に着いてからだ」

「分かった」

「……ああ（ちくしょう、ハオの奴マジで何しやがったんだ？）」

そうこうしているうちに学園長室に到着した。

コンコン

「学園長、龍宮です」

「おお、入っとくれ」

「失礼します。さあ、入ってくれホ口ホ口さん」

龍宮に促され、ホ口ホ口も中に入った。

「邪魔するぜー……………あ？」

「ホ口ホ口君、じゃったか。よく来たの」

そこにいたのは、後頭部が異常な爺さんだった。

「（竜のリーゼントより遥かにヤベエ！！）」

直後、学園長室にホロホロの笑い声が響き渡った。

麻帆良での初戦闘（後書き）

今回は学園長室での会話がメイン。

ホロホロがバカな頭なりに考えるぜ！！……まあ、それでもホロホロはホロホロですが

水口水口の処遇（前書き）

ご都合主義って言葉、良いですね。これを使えば大抵はどうにかなる………はい、すみません。

それでは、最新話です。

水口水口の処遇

「ギャハハハハハハハハハハ！」

学園長室に水口水口の笑い声が響き渡っていた。水口水口は、学園長（の後頭部）を見て、驚きの表情を見せた後、盛大に笑い始めた。

「爺さん、その頭はねえよ！どうなってんだその後頭部！！」

腹を抱えながら水口水口は床を転がり回る。笑い過ぎてもはや涙も出てきた。

「笑い過ぎじゃないかのう……」

学園長は学園長でショックを受けているようで、こちらはこちらでまた違った意味で涙を浮かべていた。そして数分後、ホ口ホ口はようやく落ち着いた。

「あー、笑った笑った。爺さん、あんた面白すぎるぜ」

「わしは全然面白くないわい……」

テンションが対照的な二人。こんなので話が進むのだろうか？

「学園長、しっかりして下さい。これから彼の処遇について話すんですよ?。」

学園長の隣にいたダンディーな男、タカミチ・Ｔ・高畑が学園長に呼び掛ける。これでようやく学園長は立ち直った。これで会話が進

むだろう。

「おお、そうじゃった。すまんの、高畑君。……ところで、君も少し笑ってたじゃろ？」

タカミチの肩がぴくりと震えた。学園長の言う通り、ホロホロが笑っている間、タカミチもつられて笑ってしまったのだ。勿論、龍宮と刹那も少し笑っていた。

「そ、そんなことはありませんよ学園長……くくっ」

「……減給じゃ」

「ちよっ、横暴ですよ学園長！」

……訂正、まだ会話は進まないようだ。

「さて、お互いまだ何も知らんからの。自己紹介から入ろうではないか」

ようやく落ち着いた部屋の中で学園長が切り出した。

「わしはここ、麻帆良学園の学園長をやっておる近衛近衛門じゃ」

「俺はホロホロ。よろしく頼むぜ」

「それではホロホロ君。君にまず聞きたいことがある」

瞬間、さっきまでの緩んだ空気から一変、室内が緊張に満ちた。

「君はどうやってここに来たのかね？」

「どうやってって……俺が聞きてえよ」

これはホロホロの本音だ。ハオが何かをしたことは分かるが、それが何か分らない。

「では、ここに来たのは君の意思ではないと？」

「ああ。確かに俺の体は宇宙プラントにあつたはずなのに、気付いたらここにいたんだ」

「宇宙プラント……よく分かんが転移魔法を使つたのかのう？」

ちよつと待て。ホロホロは耳を疑つた。

「魔法？何だそりゃ？何かのOSか？」

「……………魔法を知らんじゃと？」

やはりおかしい。刹那は眼前の二人の会話を聞いてそう思った。自分と話しているときもホロホロとの会話には噛み合わないところがあつた。

「そもそもここは日本のどこら辺なんだ？」

「埼玉県じゃよ。埼玉県麻帆良市じゃ」

「埼玉だつて！？じゃあ爺さん、ふんばりが丘つて場所分かるか？
確か埼玉県だつたはずだ！」

ホロホロがそう言うと、学園長とタカミチが二人でなにやら話し始めた。そして、タカミチが少し気まずげに言った。

「えっと、ホロホロ君。埼玉県にはふんばりが丘なんて名前の地名は無いんだよ」

「……………は？」

ホロホロの頭は暴発寸前だった。

「ホロホロ君：君はいつたいどこから来たんじゃ……………？」

眉間に皺を寄せて呟いた学園長。誰に向けたものでもなかったが、その問いに返事が返ってきた。

——その質問には僕が答えてやろう

バツ、とその場にいた全員が部屋中を見渡した。その中でもホロホロは部屋中を睨み付けるように見渡した。

「その声……ハオ！てめえ、俺に何しやがつた！！」

——少し黙っているホロホロ。どうせバカなお前には理解できない話だ

「誰がバカだてめえ！！」

喚くホ口ホ口を無視して、声は学園長へと語りかけた。

——近衛門、と言ったな？

「……そうじゃが、お主は誰じゃ？」

——説明してもいいが、色々と面倒だからな。ここにいる全員に映像を見せてやる。全員眼を瞑れ

得体の知れない声ではあるが、その声には逆らうことを許さないような威圧感があつた。その場にいたホ口ホ口も含めた全員が眼を閉じた。

眼を瞑つたと同時に何かの映像が流れた。全く分からないのに理解できる。記憶や知識を直接脳に植え付けられたような感覚。

シャーマン、憑依合体、シャーマンファイト、オーバーソウル、十祭司、シャーマンキング、グレートスピリッツ、五大精霊、五人の戦士………

近衛門、タカミチ、刹那、龍宮は2000年に起きたシャーマンファイトについて理解した——させられた。

「なんじゃあれは……次元が違い過ぎるわい」

——理解したか？これが僕やホ口ホ口がいた世界で起きた戦いだいきなり脳に莫大な量の情報が送られてきた反動で、4人は激しい頭痛に襲われた。座っていた学園長はともかく、立っていた他の3人は壁にもたれて気分を落ち着かせている。

——大まかなところは今見た映像と与えた知識で分かるだろう。
何か質問はあるか？

「…………お主はなぜホ口ホ口君だけをこちらの世界に送ったのじゃ？」

——ただの気まぐれさ。それ以上の理由なんてない

「そうか…………ホ口ホ口君をそちらの世界に戻す気はあるのかのう？」

確かに今最も重要なことはそれだろう。その答え如何によって、ホ口ホ口の人生が変わるのだ。

——しばらくはないな。これからもあるか分からない

「おい！ふざけんなよハオ！俺を戻しやがれ！！」

——じゃあなホ口ホ口。せいぜい異世界の生活を楽しむといい

最後までホ口ホ口の言葉に反応せずにハオはこの世界から意識を外した。

「……………」

「…………ホ口ホ口さん、大丈夫ですか？」

床でうなだれているホ口ホ口に刹那が恐る恐る声をかけた。

「大丈夫大丈夫……大丈夫じゃねえよ！」

ここにきてついにホ口ホ口はキレた。

「なんだあの野郎！人を異世界だが高んだかに飛ばしといて理由が気まぐれだと！帰ったら泣くまでぶん殴ってやる！！」

まあ、その帰る方法がないわけだが。

「ホ口ホ口君、いきなりですまんが、君のこれからの生活について話をしたい」

「あ？」

「帰る方法がないならばここで生活するしかないじゃろう？」

確かにその通りだ。この世界ではホ口ホ口なんて人間は存在しないのだ。当然、国籍なんてない。結局、誰かの庇護下に入らなければろくな生活もできない。待っているのはホームレス生活だ。

「わしは君の生活を支援してもよいと思っておる」

「…いいのか？」

「構わんよ。………ただし」

ぴっ、と指を立てる学園長。

「君にはある仕事を受けて欲しい」

「……仕事？」

「そうじゃ。詳しい説明は省くが、簡単に言えば先ほど君たちが戦ったモノたちとの戦闘じゃ」

ホロホロは少し前のことを思い出す。正直言って大した強さではなかった。ストレス発散にはちょうど良いかもしれない。

「いいぜ、そんなくらいやってやるよ」

「そうかの。しかし今日はもう遅い、詳しい説明は明日することにしよう」

やっと休める、とホロホロは肩を落とした。しかし、重要なことに気付いた。

「どこで寝りゃいいんだ？」

「「「「………あっ」「」「」」

全員、忘れていた。

最終的にホロホロはタカミチの部屋に泊まることになった。

「龍宮君と刹那君も明日もう一度来てもらって構わんかの？」

「ああ、問題ないよ」

「私事です」

「では解散じゃ。ちなみに二人とも、この事はまだ他言無用で頼むぞい」

「わりいなタカミチさん、いきなり押し掛けちまって」

あの後龍宮、刹那の二人と別れたホ口ホ口は、タカミチに連れられてタカミチの部屋に来ていた。

「気にしなくていいよ。ところで君の持ち霊……コロロといったかな。今もいるのかい？」

「おう。出てきなコロロ」

『クルッ！』

ホ口ホ口の懷に隠れていたコロロがふよふよと浮かび上がった。

「コロポツクルなんて初めて見たよ」

「まあ、そんなに数は多くないしな（しかも元人間だし）」

コロロは純粹なコロポツクルではない。黒部民子という人間の霊が、厳しい修業の果てにコロポツクルへと進化したのがコロロだ。

「タカミチさん、魔法つてのを詳しく教えてくれねえか？」

純粹な興味というのもあるが、出来れば戦力に加えたいと思っ
ているホロホロだ。

「構わないけど、僕もOSについて詳しく教えてもらっていいかい
？」

対してタカミチも似たようなものだ。詠唱が出来ない彼は使える魔
法がほとんどない。運が良ければ自分もOSを修得できるかもしれ
ない。二人の利害は一致した。

「それじゃあ説明するよ」

「おう！」

その後、夜明け近くまで男二人の熱い語り合いは続いた。

ホロホロの処遇（後書き）

ハオ様を使えば大概のことはどうにかなってしまふという奇跡。

ちなみに、ホロホロの過去に関する情報はほとんど与えられていません。うちのハオ様はプライバシーを大切にします。

あと、4人にマンキンの知識が与えられている間に、ホロホロにもネギまの世界の最低限の知識は与えられました。

これからも色々とご都合主義が入りますが、平にご容赦ください。

設定（前書き）

設定というよりプロフィール。時々更新します。

設定

水口ホロ（碓氷ホロケウ）

年齢 15

誕生日 1985年11月27日

血液型 O型

出身地 北海道

趣味 スノボ

好きな食べ物 ジンギスカン

将来の夢 でかいフキ畑を作ること

持ち霊 コロロ

媒介 スノボ、イクパスイ

OS形態（ ）内は媒介

・ニポポパンチ（スノボ）

・ニポポテクンペ《ニポポ手甲》、ハラキホク《レフトハズバンド》、シモンマタク《ライトワイフ》（イクパスイ）

使う技

- ・カウカウプリウエンペ《荒くれ者の電》
- ・ネイケフイケキロロ《どことして何一つ非の打ち所のない力》
- ・モソソクルツペ《眠っている者を目覚めさせる霜》
- ・エムシノキペコンル《剣のつらら》
- ・エピツタルキウパシホルツケ《全ての飲み込む雪崩》
- ・超・占事略決 巫門遁甲
- ・ウオセ《遠吠え》
- ・ルプシカテク《凍らせる手》
- ・キンラカラカウカウプリウエンペ《猛る荒くれ者の電》
- ・シューシュワツキ《風が唸る》
- ・カムイランケオプケニ《神から授かった拳》

アイヌ出身の水と氷、雪のシャーマン。ホロホロは愛称。元々「炎」を意味する「ウフユイ」という言葉が、国政により文字をあてられ「碓氷」となった。そして狼を意味するホロケウという名前を持つ。単純熱血な性格だが、意外に単独行動好きだったり、本人も自覚していないあクールな一面がある。10歳の時に好きだった女の子、黒部民子を亡くしている。

現在、麻帆良滞在中。

コロロ（元、黒部民子）

誕生日（享年） 10歳

血液型 不明

出身地 北海道

趣味 かくれんぼ

将来の夢 生まれ変わったら八頭身になりたい

コロポックルはアイヌ語で、フキの葉の下の小人という意味。常にフキの葉を手にとってるのが特徴的。元々は黒部民子という人間だったが、ある事件で故人となる。その後、厳しい修業の末に短期間で精霊へと進化した。

シャーマンキング・ハオの気まぐれにより、可視不可視を自分で操れるようになった。

現在、麻帆良滞在中。

可視（具現化）状態

靈感が皆無というくらいの人でない限りは見える。

不可視状態

たつみー隊長並の能力がないと見ることが出来ない。

本来靈感が無い人はOSも見えないのだが、何故か誰にでも見えるようになった。これもハオ気まぐれだろうか？

迷子（前書き）

話が進まない、わけがわからないよ。

迷子

「んが……もう食べねえ……………ZZZ」

『ツクル!!』

「ぶへっ!？」

午前11時、コロロの飛び蹴りが爆睡していたホロホロに炸裂した。

「おお……!容赦ねえなコロロ……」

『クルツクルツ!』

呻くホロホロをスルーして、コロロはテーブル上の紙を指差した。

「紙?あー何々、『おはようホロホロ君、僕は仕事があるから先に
出るけど、昼ご飯代は置いておくから麻帆良の見物がてらに何か適
当に食べてくれ。昨日の話の続きもあるから5時半頃には帰ってき
てくれよ。タカミチ P.S、麻帆良は広いから迷子にならないよ
うに』……5時半とか迷子とか……子供かよ」

少しバカにされている感が否めないが、敢えて無視した。

そして、紙の横には千円札が三枚置いてあった。

「借りができたな!。よし、行くかコロロ!」

『クルツ!!』

ホ口ホ口とコロコは意気揚々と麻帆良の街へと繰り出した。

「へえ、でつけえな」

『クル』

二人の視線の先にはやたらと高い建物が立ち並んでいた。

「まあまずは飯だな。何食おう?」

立ち並ぶ街並みの中を歩き回っていたホ口ホ口は、ある店を発見した。

『本場の味!ジンギスカン専門店《意気羊羊》』

「…………ここにすつか」

ホ口ホ口は吸い込まれるように店内に入ってしまった。

「ふう、食った食った。美味かったぜ」

店から出てきたホ口ホ口は笑みを浮かべながら腹を叩いた。どうやら満足したらしい。

「さーて、これからどうすつか…………」

『クルルツクル!』

コロロがホロホロの服の中からある方向を指差した。その先には、
やたらとデカイ木。

「デケエな……あそこに行きたいのか？」

『クルツ!~!』

「よし、そんじゃあ行くか！」

『クルー!』

ホロホロはデカイ木——世界樹がある場所に向かって走りだした。

「おえ……気分わりい………」

ホロホロは世界樹の根元にもたれこんでいた。満腹状態で1キロ近く全力疾走したのだ。気分も悪くなるだろう。

『クル……』

「大丈夫だって……それより、ここ気に入ったか？」

『クルツ』

「そうか、そりゃ良かった」

嬉しそうに世界樹の周りを飛ぶコロロを見て、ホロホロも自然と頬が緩んだ。
根元に座っていたホロホロだったが、秋特有の涼しい風に眠気を誘われ、ほどなくして眠りについた。

『クルッ!』

「ぶへっ!？」

本日二度目のコロロキックでホロホロは目を覚ました。周りを見てみれば景色は赤に染まっていた。

「……………なあコロロ、今何時だ？」

『ツクル!』

コロロが指差した時計を見れば、5時50分を表示していた。ホロホロは冷や汗が止まらなかった。

「……………」

寝ぼけているのかもしれない。ホロホロは目を擦ってもう一度時計を見た。しかし、結果は同じだった。

「ヤベエ! 5時半過ぎてるじゃねえか!? コロロ、すぐにタカミチさんの家に帰るぞ!！」

『クルッ!!!』

走りだしたホロホロは数秒とたたずに立ち止まった。その顔には明らかに焦りがあった。

「タカミチさんの家……………どこだ？」

全力疾走で世界樹まで走ったホロホロは景色など覚えていたはずもなく、自分がどの道を通ったのか忘れてしまった。
結局、帰りが遅いと探しに出ていたタカミチによってホロホロは無事帰ることができた。

「それは災難じゃったのう」

「この麻帆良が広過ぎなんだよ……」

午後7時半、昨日のメンバーは学園長室に集まっていた。

「だから書き置きに広いと書いてあっただろう？」

「あんなに広いなんて思うかよ！」

『ツクル！』

「龍宮、いったい何があったんだ？」

「ホロホロさん、迷子になったらしいよ」

「それは…まあ、麻帆良は広いから分からないでもないが」

ホ口ホ口迷子事件の内容を聞いた二人は、笑いを堪えていた。

「…笑ってんじゃねえよ」

「いやいや、笑うだなんてとんでもない……くくっ」

「わ、笑うな龍宮、私までつられ…ふふっ」

「凍らすぞお前ら……」

額に青筋を浮かべたホ口ホ口がOSすると、龍宮も刹那もすぐに笑いを引っ込めた。

「ふむ、ホ口ホ口君、そろそろ話に入りいと思っんじやが」

「ああ悪い、続けてくれ」

「うむ、君のシフトは基本的に週3日になる。主に二人組か三人組を組むことになっておるのじやが、君には龍宮君と刹那君と組んでもらおうと思っておる。一度組んだ二人ならば連携もとやすいはずじゃ。二人もそれでいいかの？」

「構わないよ」

「私も異論ありません」

先ほどとは違い凜とした表情をする龍宮と刹那。ちゃんと締めるときは締めるようだ。

「他の魔法先生や魔法生徒たちにはまた時間を作ってもらい、ホ口

ホ口君を紹介しようと思う」

「分かった」

「……それでなんじゃが、君は今何歳かの？」

「あ？15だけど、何かあんのか？」

それを聞いて学園長は顎髭をさすりながら唸り始めた。

「15歳といえば中三じゃが、今は秋じゃからすぐに卒業してしま
うしのう。」

「秋……？なあ爺さん、今日って何月何日だ？」

「11月2日じゃが？」

「俺、誕生日11月27日なんだよ」

もう高一ではないか、とさらに唸る学園長。彼はこれで皺が増えた
とか増えなかったとか。

二時間にわたる話し合いの末、ホ口ホ口は龍宮と同じような傭兵の
ような扱いとなった。傭兵といっても、ホ口ホ口の表向きの国籍や
履歴書などが完成するまでで、その後のことはその時考えるという
何ともホ口ホ口らしい結論だった。

「今日は特に警備の仕事は無いからの。そのまま帰ってくれていい
ぞい。あとこれは君の住む場所の鍵と地図じゃ。家具は最低限は揃
つとるからの」

「おお、サンキュー。よし、帰るかコロロ！」

『クルッ！！』

ホロホロは4人に別れを告げて部屋を出ていった。

「で、何で真名と刹那がいるんだよ」

ホロホロの隣にはさっき別れたはずの龍宮と刹那が並んでいた。刹那は苦笑しているが、龍宮はニヒルな笑みを浮かべて言った。

「なんでって…またホロホロさんが迷子になったら大変だろう？だから私と刹那で案内してあげるんだよ」

「す、すいませんホロホロさん。私は止めたんですが、龍宮が聞かなくて…」

弁明を試みる刹那だが、今のホロホロには大して効果はない。

「おいおい刹那、私が提案したときお前も笑っていただろう？」

「た、龍宮！？ち、違いますよホロホロさん！私は笑ってなど…」

とりあえずホロホロの心の中で、そのうち龍宮と刹那に仕返しをすることが決定した。一悶着あったが、ホロホロはどうにか迷わずたどり着くことが出来た。

「えらいじゃないかホ口ホ口さん。迷わずたどり着けたぞ」

「そんなに凍りたいか？刹那もいつまでも笑うんじゃねえよ」

「す、すいません」

「凍らされるのは勘弁して欲しいね」

なら言っくんじゃねえよ、と軽く舌打ちしながらホ口ホ口は自分の暮らす家を見つめた。

「……一軒家だな」

『クル……』

そう、一軒家だった。龍宮と刹那も流石にこれは予想していなかったらしく、驚いていた。

その家は一人で住むには広く、大勢で暮らすには狭いという微妙な大きさの家だった。しかも何故かまだ新しい。いつ、何の為に建てたのやら。

「いいのか？こんな場所に住んで」

「ボロい家よりはいいじゃないか。素直に学園長の好意に甘えておくといい」

それもそうだな、とホ口ホ口はもらった鍵でドアを開けた。

「じゃあホ口ホ口さん、私たちはこれでお邪魔するよ」

「ああ、また来たら食い物くらいは出してやるよ」

「それは楽しみだ。警備の仕事の後にでも寄らせてもらおうかな。じゃあおやすみホロホロさん」

「失礼します、ホロホロさん」

「おお、じゃあな」

そう言つて、三人は今度こそ別れた。

ちなみに二部屋あつた客室のうち一部屋がホロホロの寝室になった。

迷子（後書き）

ホロホロ、学校には行かない、の巻。一時的にしか滞在しないと思
っているホロホロが学校なんかに行こうと思うだろうか？いや思わ
ない（反語）。

エヴァとの絡みはまたそのうち。しばらくはオリジナルの話が続
きます。

金髪幼女（前書き）

戦闘が短い短い。どうしたものか。あまり戦闘を長くすると文章力の無さが露呈するからなあ。まあ、もうすでにアウトかもしれないが。

金髪幼女

「俺たちって基本的に日中暇だよな……」

「クル……」

ホロホロとコロロは居間に寝転がりながらばやいた。麻帆良に来て一週間。深夜の警備もこなして学園長から報酬ももらって、少しずつここでの生活にも慣れてきたホロホロだったが、問題があった。

「暇だ……」

そう、暇なのだ。警備は深夜、つまりそれ以外は特にすることが無い。休日ならば刹那や龍宮と話をして時間を潰すことができるが、平日はそうもいかない。まあ、何が言いたいのかというと、暇なのだ。

「こういうのって、ニートって言うんだっただか……？」

『クルル……』

深夜の仕事をしているからニートではないのだが、まあ裏の仕事なので一般人からすればニートということに変わりはないのだが。

「ホロにげえ……」

結局、ホロホロは惰眠を貪ることにした。現実逃避とも言う。

「てかお前ら、警備の仕事の前は大抵ここにいるよな。寮に住んでんじゃねえのか？」

深夜、ホロホロの家で餡蜜を食べている真名と、やはりまだ遠慮があるのかソファーに座ってじっとしている刹那に呆れたような視線を向けるホロホロ。

「管理人は事情を知っているからね。帰りが遅くても大丈夫なのさ。それに、ここのほうが警備場所には近いからね」

「私と龍宮は同じ部屋なので他の人たちにバレることもありませんし」

そついう問題なのか？と思わなくてもないホロホロだが、まあ本人たちが良いと言っているのだから良いんだろう。

「それに、可愛い中学生二人に囲まれてホロホロさんも役得じゃないか。嬉しいだろう？」

「た、龍宮、その言い方はどうにかならないのか…」

色事や色恋沙汰にはまったく免疫が無い刹那は顔を真っ赤にしていた。

「中学生ねえ。刹那はともかく龍宮はどっちかつつと大学せ」何か言ったかい？」……何でも無いです」

銃口を向けられ素直に謝るホ口ホ口。そもそも氷で防ぐことができないホ口ホ口に銃弾は効かないのだが、今回ばかりは防げる気がしなかった。

「まあ確かに可愛いつてのは認めるぜ。お前らの学校ってみんなそうなのか？」

「皆というわけでは無いけどね。私たちのクラスは全員レベルが高いと思うよ」

「そうですね。皆さん私などよりも綺麗だと思いますよ」

刹那より綺麗ってどんなレベルだよ、と思う。少なくとも刹那も十分美少女と呼べるはずだが。なんでも見た目が小学生と呼べる者から龍宮のように大人に見える者までいるのだとか。

「流石に小学生はねえ……いや、そんなこともねえか」

ホ口ホ口は小学生を否定しようとしてまん太を思い出した。彼も十分小学生と呼べる小ささだった。

「そろそろ時間だ。行くぞ二人とも」

「分かりました」

「この餡蜜を食べ終わるまで待っていてくれ」

「……早く食えよ」

龍宮の横にはコンビニで買った餡蜜の空のパックが二つ、重なって

いた。

「刹那、そっち行つたぞ！」

「はい！食らえ、斬岩剣！！」

刹那の倍近くはありそうな身長 of 鬼を一撃で斬り伏せる。この一週間で、三人の布陣はホロホロと刹那が遊撃、二人が取りこぼしたものを龍宮が処理するというものになっていた。

「くつ、散れ！多方向から仕掛けるんじゃない！」

一ヶ所に固まっていたはやられると感じた式神のリーダー格の鬼が全員をホロホロたちを囲むように指示を出す。

「させるかよ！モソソクルツペ！！」

しかし、ホロホロのモソソクルツペで地面から生えた氷柱によって道を阻まれ、式神たちは身動きが取れなくなった。

「オヤビン、動けねえツスよ！？」

「焦るな！所詮は氷、壊せば「やらせるかよ！」ぬう！？」

「カウカウプリウエンペ！！」

「斬鉄閃！！」

『ぬうおおおおおお！！』

モソソクルツペに閉じ込められていた鬼たちは二人の集中放火によって還された。

「お疲れさまですホロホロさん」

「おお、刹那も真名もお疲れさん」

「お疲れ。相変わらずすごい冷氣だね。こつちまで巻き添えになりそうだ」

「ちゃんと加減はしてるぜ」

互いに労っていたところに刹那の携帯に電話がかかってきた。

「はい……分かりました。では、失礼します」

「どうした？」

「今日はもうあがっていいそうです」

「珍しいじゃないか」

三人で頷き合う。いつもならばあと一時間近くは警備の時間があるのだが、今日はなぜか早かった。

「ま、早く帰れるってんだから良いじゃねえか」

「そつだね、報酬が下がる訳でもないし」

しかし早く帰れるのならそれに越したことはない。ホロホロは遅くても大丈夫だが、刹那と龍宮は学生である。徹夜に慣れているとはいえ翌日に響かないわけではないのだ。

「そっぴゃ、魚屋のおっちゃんなんか多めに魚くれたんだけどよ、食い切れねえから少し持って帰ってくんねえか？」

「よろしいんですか？」

「ああ。腐らせちまったらもったいねえしな」

「なら、有り難くいただくかな」

「ありがとうございます、ホロホロさん」

「気にすんなって」

近所の主婦みたいな会話を続けながら三人は帰路についた。

その頃の学園長室

「答えるジジイ！あの小僧は何者だー！」

「ちょ……エヴァンジェリン……苦し……」

学園長が金髪幼女吸血鬼、もといエヴァンジェリンに締め上げられていた。

「エヴァ、そのくらいで止めないと。学園長だって人間なんだから」

「マスター、学園長の心拍数が減少しています」

「ふん、このくらいで死ぬようなジジイじゃない。むしろ死ぬのかこのジジイ？」

「あ……も…ダメ………」

学園長は落ちた。

「で、エヴァは何を聞きに来たんだい？」

「あのホロホロとかいう小僧のことだ。なんだあいつは、魔力の欠片も感じんではないか」

「あの腕の装具からも魔力やアーティファクトの契約の力などは感じられませんでした」

「さあ教えるタカミチ、次はお前を締め上げてもいいんだぞ？」

「勘弁してくれよ」

タカミチはエヴァに話すかどうか迷った。異世界の人間だと言っても信じてもらえないだろう。いつの間にか復活している学園長も判断に迷っているようだ。前みたいにシャーマンキングが説明をしてくれれば楽なのだが、そんな都合の良いことは、

——困っているようだな近衛門。

あつた。

「なんだこの声は？どこの誰だキサマ？」

——身の程を弁えろよ吸血鬼。灰にするぞ。

「は！隠れて話している奴なんぞにこの私がやられると思っているのか？」

「エヴァ、止めてくれ！本当に死ぬから！」

タカミチと学園長は必死だ。シャーマンキングとなったハオの持ち霊、グレートスピリッツを使えばたとえ異世界であるここでも安全とは言えない。映像で見たものが再現されれば間違いなく終わりだ。

「タカミチ、この声の正体を知っているのか？」

「知っているから言ってるんだ。頼む、これ以上彼を刺激しないでくれ！」

エヴァンジェリンはタカミチがこんなにうろたえているところを久しぶりに見た。学園長も冷や汗をダラダラと流している。

「なんだ、そんなに危険な奴なのか？」

「……危険なんてレベルじゃないよ」

——なに、直に見せた方が早いだろう。見せてやるよ

直後、エヴァンジェリンにタカミチたちがされたことと同じ情報と映像が流れた。エヴァは頭痛でふらついた。

「マスター、大丈夫ですか？」

「少しふらついただけだ。……しかし、なんだ今のは」

——これがホロホロや僕がいる世界だ。理解したか？

「……ああ、理解したさ」

——お前なんて所詮はその程度の存在なんだ。今なら謝れば殺さずについてやるぞ？

普通の人間ならばすぐに屈伏するである威圧感を放つ声にこの場に
いる全員が身を強ばらせる。ロボットである茶々丸までもが、動け
なくなった。しかし、エヴァンジェリンは口角を吊り上げて言った。

「……は、誰が謝ったりなどするものか」

——死にたいのか？

「命乞いまでして無様に生き延びるくらいなら私は死を選ぶさ」

部屋の中を緊張を孕んだ沈黙が支配する。しばらくして、ハオの声
が響いた。

——くくつ、まあ合格だ。生かしてやるよ

「……なに？」

——まあ、あそこで謝ったりすれば本気で殺しても良かったんだけどね

「私を試していたのか？」

——この程度で屈伏する奴なんかに興味はないからね

シャーマンの強さは心の強さで決まる。かつて、シャーマンキングとなったハオがグレートスピリッツと共にホロホロたちの前に立ちはだかった時、ホロホロたちは決して心が折れなかった。声に威圧感を持たせた程度で折れる心の弱い者などに、ハオは興味などない。

——ま、僕はここいらで失礼するよ。それでも僕は忙しいんでね

その直後、部屋を覆っていた威圧感が霧散した。

「ふう……生きた心地がせんわい」

「僕ですよ。エヴァも無茶するよ」

「ふん、この私がひれ伏すなどという屈辱的な選択を取る筈がなくなる。…だが、今の映像を見て益々奴に会ってみたくなったよ」

笑うエヴァンジェリンを見て、タカミチと学園長は思った。あ、これ絶対なんかする気だ、と。

「ところでキサマら。なぜ奴がいることを隠していた？」

「いや、三日前に他の魔法先生や魔法生徒たちに紹介したんだけど」

「は……………」

「エヴァンジェリンにも連絡はした筈じゃがのう？」

エヴァンジェリンはギギ、と壊れかけの機械のような音をたてながら、従者である茶々丸を見た。

「はい、確かに学園長から連絡を承りました」

「なぜ黙っていた茶々丸！」

「マスターにお伝えしましたが、マスターは『興味ない』と言ってテレビゲームに熱中していましたので」

「……………」

「……………わし、首締められ損じゃね？」

部屋の中を先ほどとは違った痛々しい沈黙を支配した。

「（ああ、羞恥で震えるマスター。これは永久保存版ですね）」

金髪幼女（後書き）

エヴァンジェリン。シャーマンキングに喧嘩を売る（？）の回でした。作者の中のエヴァンジェリンはこんな感じなんです。ほのぼのし過ぎかねえ。タグにほのぼのって入れたほうが良いかしんねえ。

水口水口の日常（前書き）

短い、ただこの一言です。

ホロホロの日常

「待てこら糞ガキ共!!」

「逃げろー!!」

数人のチビたちを追い回しているホロホロ。なぜこうなったかは、少し時を遡る。

「やっぱり日中は暇だよなー」

いつもの如く暇を持て余していたホロホロは比較的よく来る公園に足を運んでいた。

「あ、ホロホロ兄ちゃんだ!!」

「ほんとだ! ニートのホロホロ兄ちゃんだ!!」

「誰がニートがお前ら!!」

ここ数日で公園でたまに遊んでいる子供たちに懐かれて(?)しまったホロホロ。

「お前ら、毎度毎度俺をおちくりやが「食らえ!!」」

キン!

「ぐはっ!？」

一人の子供が投げた野球ボールがホロホロの急所にクリーンヒットした。

「やった、命中だ!」

ひゃっほーい!とハイタッチを交わす子供たちとうつつ伏せで倒れ伏すホロホロ。近所の人たちにはもう見慣れた光景となっていた。

「……………ふ、ふふふ」

ゆらり、とホロホロが立ち上がった。顔は下を向き、腕はだらんと下げている。

「てめえら、もう許さねえぞ……………!」

ホロホロが顔を上げて子供たちを睨むが、子供たちはどこ吹く風。むしろこれから起こることにワクワクしている。

「お仕置きだ糞ガキ共!」

「鬼ごっこだー!」

「逃げろー!」

こうして、恒例の鬼ごっこが始まった。ちなみに、今のところホロホロの全敗である。

「はあ、はあ……くつそ、あのガキ共、どんだけ素早いんだよ」

ホロホロは、公園のベンチに横たわっていた。今日も負けた。ちなみに、全員捕まえば勝ちなのだが、なぜか子供たちも反撃してくるという設定付き。もはや鬼ごっこではない。

「疲れたぜ………」

13時過ぎから遊んでいて、そんなこんなでもう夕方。かれこれ3時間以上遊んで（遊ばれて）いたことになる。冬が近づいてきて、日が暮れるのも早くなった。子供たちは帰る時間である。

「ホロホロ兄ちゃん、また鬼ごっこしようぜー！」

「二度とやらねえ……！」

片方の手を親と繋ぎ、手を振りながら言う少年に、同じく手を振り返しながら答えるホロホロ。そう言いながらも毎回付き合っているあたり、大概お人好しである。

「あれ、ホロホロ君じゃないか」

「あ………？」

声のした方に振り向いてみれば、無精髭を生やしたダンディーなオジサマ、タカミチがいた。

「よおタカミチ、どしたんだこんなところで」

「僕は広域指導員だから見回りだね。そういう君はどうなんだい？」

「それは……」

かくかくしかじかうまうま、ざっくりと説明したホロホロだったが、タカミチには分かってもらえたようだ。

「はは、お疲れさま」

「まったくだぜ。なんであんなに元気なんだよ」

「まあ、あの頃の子供は元気過ぎるくらいがちょうど良いんだと思うよ」

「だからって人の急所狙ってんじゃねえよ……」

苦笑するタカミチ。そのうち使い物にならなくなるんじゃないか？とは思っても言わなかった。

「麻帆良にはもう慣れたかい？」

「大分な。商店街のおっちゃんたちとは良くダベったりするし。警備がある日は刹那たちもよく俺ん家来るしな」

その度に龍宮に、食い物を漁られたりしているわけだが、主にお菓子を。どこに隠していても見つけられてしまう。今のところ隠しておせた日はない。ここでも全敗だった。

「ま、それなりに楽しくやってるぜ」

「そうかい？それなら良いんだ。じゃあ僕は見回りがあるからもう行くよ。またね」

「ああ、じゃあな」

二人は別れて、ホロホロは家へと足を向けた。

「あいつら、元気してっかな？」

晩飯を食べ終わり、いつものようにダラダラしていたホロホロがぼつり、と呟いた。麻帆良での生活は悪くない。むしろ快適といつてもいいくらいだ。

「ハオのやつ、皆に俺のこと説明してんだろうな？」

しかし、ホロホロにとっての住む世界はやはり向こうなのだ。時々忘れてしまいそうになるが、それは変わらない。

「いつ帰れんだろう？」

だれも答えてはくれない。一生帰れないわけではない。ハオの気分次第というだけの話だ。

『クル…』

「ん、ああ、悪いなコロコ、柄にもなく暗くなっちまった」

『クルル……。クルツクル!』

きつと帰れるよ、と言われた気がした。コロロには世話になってばかりだ、とホロホロは思う。

「そうだな。……よし、明日からも気合い入れていくぞコロロ!」

『クルルツクル!』

コロロには必ず世話になった恩を返そう。そう思ったホロホロだった。

ホロホロの日常（後書き）

なんだか後半がおかしなことに。こんなはずじゃなかったんだけどなあ？

ちなみに、ホロホロの警備のときの服装は、シャーマンキング完全版21巻の表紙の服装です。私服はまあ、色々ですね。ただ、基本半袖。物語内ではもうすぐ冬なのに。

幼女来たる

「行くぞ刹那」

「ああ」

深夜、女子寮を抜け出そうとしている者が二人。言わずもがな、桜咲刹那と龍宮真名である。

「龍宮、あまりホ口ホ口さんの食べ物漁るのはどうかと思うぞ？」

「ふふつ、あの人が隠しているお菓子を見つけた時のあの悔しそうな顔を見るのが楽しいんだ」

純粹にお菓子も楽しみにしてるしね、と付け足す龍宮に刹那は嘆息した。何度言ってもこれである。

「刹那こそ、ホ口ホ口さんをまったく警戒してないじゃないか。いつもならお嬢様を狙っているかも、とか言い出してもおかしくなさそうだけど」

「異世界から来たホ口ホ口さんがお嬢様のことを知っている筈がないだろう。」

刹那はお嬢様、近衛木乃香の護衛である。確かにどこも知れぬ輩なら警戒するだろうが、ホ口ホ口は異世界から来た人間だ。木乃香のことを知っている筈がない。

「それに、ホ口ホ口さんはそんなことをしない人なのは龍宮だって

分かっているだろう」

「まあね。あの人はそんなことはせずに真正面から突っ込んで来る人だ」

龍宮の言うとおり、ホロホロはからめ手や人質などを取ったりするような人間ではない。そんなことはせずに正面から敵を叩き潰す性格だ。それはここしばらくホロホロと組んでいた二人が一番良く分かっている。

「なんとというか、少し考えなしなところがある気がしないでもないけどね」

「そういう事は思っても口に出すな」

私もそう思う、とは口に出せなかった。

そして二人が女子寮から出たところに、

「待っていたぞ龍宮、刹那」

金髪少女とその従者が立っていた。

「誰が金髪少女だ!!」

……『闇の福音』エヴァンジェリンとその従者、絡繰茶々丸が立っていた。

「よし」

「……あの人はなぜ独り言を喋っているんだろう?」

「さあね」

ホロホロの家のインターホンが鳴った。今日は警備の日、そして深夜、来る人など分かりきっている。

「どーぞー」

読んでいるマンガから顔を上げることもなく、ホロホロは返事をした。

「お邪魔するよホロホロさん」

「お邪魔しますホロホロさん」

「お邪魔いたします」

「ふん、随分こぢんまりとした家だな」

何か声が多くなってねえか?と思ったホロホロだったが、顔はまだマンガに向いていた。

「さて、今日のお菓子はと……」

「またお菓子が龍宮……」

ちなみに今日は屋根裏にお菓子を隠してある。さすがに屋根裏まで

は探さないだろうと考えた結果だった。

「……………おい」

「ふむ、ここには無い、か」

「また勝手にあちこち探して…ホロホロさんに迷惑だろう」

刹那は定位置となったソファーに腰掛けた。止めると言いつつも必要以上に止めない。なぜなら、龍宮が見つけたお菓子は刹那も食べるからだ。

「今日は自信あるぜ」

「ほう……………ここも無い」

「（ああ、エヴァンジェリンさんがイライラしてる）」

「……………おい貴様ら」

「マスター、抑えてください」

やはり声が多い気がするが、スルーした。今、良いところなのだ。ちなみに、読んでいるマンガは『ワンピース』。

「見つけたぞホロホロさん。まさか屋根裏とはね」

「なんだと！ちくしょう、自信あったのに！！」

「聞かんか貴様らあああああ！！！！」

ホロホロの家に怒号が響き渡った。

「貴様、なぜ私を無視していた？」

「いや、マンガ読んでただけと…てか、お前誰だよ」

何で自分が責められているのか分からないホロホロ。彼の前には見た目だけはアイアンメイデン・ジャンヌにとっても似ている少女がいた。あくまで見た目だけは、であるが。

「ふん、私はエヴァンジェリン。600年を生きる真祖の吸血鬼、悪の魔法使いだよ」

腰に手を当てて胸を張るエヴァンジェリン。それを見たホロホロの反応はシンプルだった。

「ふーん」

「…ふーんて貴様、何か感想は無いのか？」

「んー、何かいまいちピンと来ないんだよねー」

吸血鬼というなら、以前戦ったボリス・ツェペシュの方がよっぽど吸血鬼っぽかった。

「ふん、まあいい。今日来た理由は別だからな」

「別とは？」

龍宮がエヴァンジェリンに問う。しかし、食べているお菓子のせいでシリラスの欠片もない。

「貴様、ホロホロと言ったな」

「そうだけど…何で知ってた？」

「シャーマンキングとかいう奴に映像を見せられたからな。ある程度は分かる。だが、それも今はいい。私が聞きたいのは学園の魔法使いたちと顔合わせをした時のことだ」

ホロホロ、刹那、龍宮の3人は顔合わせをしたときのことを思い浮かべた。

「タカミチから聞いたぞ。貴様、言ったそうだな。『正義なんてくだらねえ』…と」

ああ、と3人は同時に手を叩いた。実はホロホロ、学園の魔法使いたちにあまり良い印象を持たれていない。

「だってよ、なんか知らねえオッサンに、『正義のために頑張ろう』とか言われたんだぜ」

ホロホロには、彼らの言った『正義』からは重みを感じられなかった。

「お前ら、映像見たってんならX・R・A・W・Sのことも知ってるよな？」

頷く3人を見て、ホロホロは語る。彼らX・R・A・W・Sは八才を殺すという目的で結成されたチーム。

彼らは自らを正義と名乗り、彼らの法に乗っ取り裁きを下していた。確かに行き過ぎた正義であつたかもしれない。

それでもそこには確かに彼らの信念が宿っていた。

自らの正義を貫くためには命も賭ける。ホロホロはX・R・A・W・Sのことはあまり好きではなかったが、彼らの想いの強さは認めていた。

「そんなあいつらを見た後じゃよ、どうもこの連中の正義ってのは口先だけのように感じちまうんだよな」

それに、とホロホロは続ける。

「…所詮この世は弱肉強食。強い者が生き、弱い者が死ぬ。そこに正義も悪もねえんだ。ここの連中はそれが分かってなかった」

全員じゃねえけどな、と言って締めくくったホロホロを、エヴァンジェリンは愉快そうに見つめた。

「（やはりこいつは本物だ…）くくつ、弱肉強食とは実に良い例えだな」

「まあ、俺にとつちゃあ日常だしな」

ところで、とエヴァンジェリンはホロホロの話に聞き入っていた刹那と龍宮に視線を向けた。

「貴様らは学園の魔法使いたちに良い印象の無いこいつとつるんでいる？貴様らの評価も悪くなるかもしれんだぞ？」

エヴァンジェリンの間に龍宮と刹那は顔を見合せる。

「なぜ、と言われましても……」

「私は正義だの悪だのと気にしないからね。それに、彼らよりもホロホロさんの方が面白い」

お菓子もくれるしね、と付け足す龍宮にホロホロが鋭い視線を送るが、スルーされる。

「私は、ここ数日でホロホロさんがどのような方かはある程度分かっていますし、ホロホロさんが言っていることも少しは分かるつもりですし」

この二人にとって、自分が善か悪かはさした問題ではない。

龍宮は傭兵であり、麻帆良には雇われているだけだ。他に良い仕事があれば間違いなくそちらにつく。その程度の関係だ。

刹那は確かに警備の仕事はしているが、それは学園を守るためではなく木乃香を守るため。

そもそもの認識が麻帆良の魔法使いたちとは違うのだ。だから少々評価が悪くなった程度、二人にとってはさしたる問題にはならない。

そこで今まで黙っていた茶々丸が口を開いた。

「あの皆さん、警備の時間はよろしいのでしょうか？」

「……あ……」

急いで家を出ようとする3人。しかし、ホロホロが立ち止まった。

「エヴァンジェリンだったか。お前、まだ家にいるのか？」

「ふん、私はもう帰るさ」

「そうか、じゃあな」

そう言って出ていったホロホロを見てエヴァンジェリンはため息をついた。

「鍵くらい閉めていかんか…」

「私が閉めておきましょう」

ホロホロが閉め忘れた鍵を茶々丸がピッキング技術で鍵を閉めた。

「（しかしあいつ、熱血そうに見えて中々冷めたところもあるじゃないか。ふふっ、ますます面白い奴だ）」

深夜の森の中に、エヴァンジェリンの笑い声が響き渡った。

幼女来たる（後書き）

なんか絡みが淡泊すぎる気がする。しかし、今回はまあ繋ぎみたいなものなので。

『所詮この世は弱肉強食』これが言いたかった。ホロホロといえはこれでしょう。……すいません、これが言いたかったただけなんです。ただ、後悔はしてない。

別荘での一戦（前書き）

ひたすら眠い（・A・）うぼあ

二度寝します。

別荘での一戦

「ホロホロさん、お迎えに上がりました」

「……………は？」

休日、いつものように暇をしていたホロホロだったが、インターホンが鳴りドアを開けると、先日エヴァンジェリンと共に訪ねてきた茶々丸がいた。

「えっと…茶々丸だっけか？」

「はい、絡繰茶々丸と申します。マスターが招待しろと仰ったのでお迎えに上がりました」

嫌な予感しかしなかった。なにせ、いきなり人の家に上がりこんで尊大な態度で接してくるのだ。傍若無人さでいえばハオと似たり寄ったりかもしれない。

「いや、今日は予定があるんだ」

嘘である。ただ逃げたいがだけの言い訳だ。

「そうですか。ではお連れ致します」

「ああ、そうしてくれ……………あ？」

茶々丸の返事に頷きかけたホロホロだったが、すんでのところで抑えることが出来た。そして茶々丸はホロホロを抱えて飛び始めた。

「いやいや、そこは帰るところだろ！」

「マスターから、拉致してでも連れてこいとの命令を受けましたので」

「おい、離せ！あああああ………」

その日、麻帆良では人を抱えて空を飛ぶロボが目撃された。ちなみに、目撃した人はドナドナも聞こえたらしい。

茶々丸が着地したのは森の中にあるログハウスの前だった。

「エヴァンジェリンは寮に住んでねえのか？」

「マスターは特別扱いということですので」

へえ、と言ってもう一度ログハウスを見る。ホロホロの家より大きい。だが羨ましいとは思わない。あまり大きくても部屋が余るだけだ。決して負け惜しみではない。ちなみにホロホロの家、客室が一部屋余っているのだが、それは龍宮や刹那が警備の前に仮眠を取ったりするのに使っている。

「ではお入りください」

「おお、邪魔するぜ」

茶々丸に促されて中に入ると、大量の人形に出迎えられた。

「やたらファンシーだな……」

「こちらです。ついて来てください」

「あ、ああ……」

驚いているホロホロを置いてスイスイと進んでいく茶々丸に慌ててついていく。そして着いたのはなにやら城の模型のような物がある部屋。

「ここにお立ちください」

「ここでもいいのか？」

「はい」

茶々丸に言われた通り模型の前に立つと、景色が変わった。

「あ？どこだここ？」

キョロキョロと周りを見回すホロホロだったが、少ししてこの場所がさっきの模型に似ていることが分かった。

「ここについての説明は後でマスターがなさると思いますので、ついて来てください」

「お、おお」

茶々丸について歩くこと数分、砂浜に到着した。そこには腕を組ん

で仁王立ちしているエヴァンジェリンがいた。

「よく来たなホロホロ」

「ああ……………んで」

返事をするホロホロだが、その意識はエヴァンジェリンには向いていない。向いているのはエヴァンジェリンの足元。

「なんでお前らがいるんだ？」

そこには疲労困憊といった様子で倒れ込んでいる龍宮と刹那の姿があった。服も所々破れている。

「……………茶々丸さんに」

「拉致られたんだ……………」

「お前らもか……………」

この瞬間、3人の間に奇妙な連帯感が生まれたとか生まれなかったとか。

「まあそれはそれとしてよ、此処どこだよ？なんかあの模型みたいなのに似てる気がするけどよ」

「それはそうだろう。此処はその模型の中だからな」

「……………は？」

エヴァンジェリンが説明を始める。ここはダイオラマ魔法球と呼ばれる魔法具の中のエヴァンジェリンが作った「別荘」で、ここでの一日は外での一時間に相当するらしい。また、ここで丸一日過ごさない限り外には出られないらしい。

「要は『ドラゴン。ール』の精神と時の部屋みたいなものだ」

「なるホロ」

そう言われるとすぐに納得したホロホロだった。

「しかし魔法ってのはスゲエな。こんなまで作っちゃうとは」

「バカを言うな。こんな代物を作れる者はそういない。私のようなレベルの魔法使いだから出来たんだ」

「ふーん」

しかし暑い。北海道出身であるホロホロにはキツイ暑さだった。薄着で良かったと結構真剣に思った。

「エ、エヴァンジェリンさん。私にはお嬢様の護衛という役目が……」

ボロボロの刹那がエヴァンジェリンに抗議する。

「ふん、一時間や二時間サボったくらいで何の問題もあるまい。そ

れにジジイにも話はつけてある。たまには休息も必要だと言っていたぞ？」

こんなのは休息じゃない。いつもより確実に疲労が溜まる。と刹那は心の中で愚痴をこぼした。

恨みがましそうな刹那の視線を無視してエヴァンジェリンはホ口ホ口に向き直った。

「さてホ口ホ口、私がここにお前を呼んだ理由は一つだ。お前の実力が見たい」

「実力？」

「そうだ、確かに私はシャーマンファイトで戦っているお前の映像を見たが、実際に見ないとその実力の程は完全には理解できん」

それはそうだ、とホ口ホ口も思う。映像を見ただけでも大まかな実力は想像出来るが、やはり実際に戦ってみたいことには詳しく知ることとは出来ない。それは分かる。しかしホ口ホ口には一つ疑問があった。

「でも別にここじゃなくても、外でやれば良いじゃねえか」

「外でそんなドンパチをやっているらば学園の魔法使いが来て面倒なことになるだろう。その点、ここならばいくら暴れても問題ない。お前だって戦いの最中に邪魔が入るのは嫌だろう？」

「そりやまあな」

「それに外では私は……………」

「？」

なにやらブツブツと言っているが聞き取れない。それに目も逸らしている。そこに茶々丸が口を挟んだ。

「マスターは封印されているので外ではあまり魔法が使えないのです」

「封印？」

なんでも、エヴァンジェリンはサウザンドマスターと呼ばれる英雄に登校地獄というふざけた名前の呪いを掛けられ学校に通い続けなければならず、その学園全体に張られている結界のせいで魔力を封じられているのだとか。しかし、別荘の中ならば学園結界の力も及ばないため、エヴァンジェリンも全力で戦うことが出来るのだ。

「何か微妙な感じの呪いだな」

「うるさい！私だってかけられるんならもう少しマシな呪いの方が良かったわ！」

本人も気にしているのだろう。若干涙目だった。

「ゴホン……まあそういうわけだから茶々丸がお前を連れてくるまでこの二人で暇潰しをしていたわけだ」

ホロホロは龍宮と刹那を見る。暇潰しにしては明らかにオーバーキルだ。

「だがまあ……………良い準備運動にはなったよ。だから……………」

その瞬間、殺気がホロホロを包み込む。ホロホロは反射的にオーバーソウルを展開する。

「存分に殺り合おうじゃないかホロホロ!!」

「魔法の射手・氷の29矢!」

「カウカウプリウエンペ!!」

二人の攻撃がぶつかり合う。弾はどちらも氷。だが、エヴァンジェリンのものよりもホロホロの氷の方が大きく、強い。結果、いくつかの雹がエヴァンジェリンへとたどり着く。

「氷楯!…ふふつ、思ったよりも力強い氷だな」

「無駄口叩く暇あんのか?モソソクルツペ!!」

地面から突き出るような氷柱がエヴァンジェリンに向かうが、エヴァンジェリンはそれを飛ぶことで回避する。

この勝負、空を飛べないホロホロにとってはかなり不利だ。モソソクルツペのような相手が地面にいないと当たらない攻撃などは意味

が無いのだから。

「ふつつ、制空権を握られた状態でどう戦う？魔法の射手・闇の101矢！！」

先程とは比べものにならない数の魔弾がホロホロを襲う。だが、この程度ならばホロホロは避けない。そもそもホロホロはあまりスピードがある方ではない。避けられないなら撃ち落とす。

「ネイケフイケキロロ！！」

広範囲の冷気の攻撃により、エヴァンジェリンの魔弾のほとんどが相殺される。それでも落としきれなかったものは手甲で防ぐ。

「空だろうが、水分さえあれば関係ねえんだよ！キンラカラ・カウカウプリウエンペ！！」

刹那、エヴァンジェリンの視界を氷が埋め尽くす。360度、氷、氷、氷。一つ一つが人と同じくらいの大きさの雹がエヴァンジェリンに殺到した。

氷が砕け空中に破片が舞う。しかし、そこにエヴァンジェリンの姿は無い。

「どこに……っ！？」

背中に寒気を感じたホロホロが咄嗟に横に跳ぶ。その直後、さつきまでホロホロがいた場所が凍りついた。

「よく避けたな。ならこれはどうだ？リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来れ氷精・闇の精！！」

これはさっきまでのものとは違う。詠唱を始めたホロホロはそう思った。こちらにも全力でいかなければ負ける。確証は無いがそう思った。

「シューシュワッキ」

「闇を従え吹雪け常夜の氷雪」

ホロホロとエヴァンジェリンが同時に手を前に突き出す。

「ウオセ！！」

「闇の吹雪！！」

二人の攻撃が拮抗する。しかし、それも長くは続かなかった。ホロホロが徐々に押され始める。エヴァンジェリンの闇の吹雪は突貫力のある持続性のある魔法。それに対し、ホロホロのウオセは瞬間の突破力こそ勝るが持続性がない。押されるのは必然だろう。それはホロホロが一番分かっていた。

「ウオセ！」

もう一度放つ。持続性が無いなら続けて撃てばいい。片手ずつ交互に撃てばタイムラグなども無い。

「おおおおおっ！！」

「はあああああつ！！」

直後、二人の間で爆発が起きた。煙が二人を覆い隠す。龍宮と刹那はそれを見つめる。

「警備の時とは大違いだな……」

「確かにな。まあ周りへの被害も考慮してのことなんだろう」

事実、ホ口ホ口の技のほとんどは後に氷が残る。大技を使ったりすれば間違いなく一般人にも何かあったと気付かれる。

閑話休題

煙が晴れると、特に大きな傷もない二人がいた。エヴァンジェリンはゆっくりと降下し、地面に降り立った。ホ口ホ口との距離は20メートル近く。

「予想以上の強さだよホ口ホ口。五人の戦士と呼ばれるだけはある」

「てめえもな。まさかここまでの強さとは思ってなかったぜ」

事実、ホ口ホ口はそう思った。学園の魔法使いとは格が違う。彼女に対抗できるのは、戦ったことはないが恐らくタカミチと学園長くらいだろう。

「ふむ、最初の目的だったお前の力試しも達成したが……やはり決着は付けないとな」

「たりめえだ。うやむやなんかにさせるかよ」

「それで提案だが、あと一撃で終わりにするというのはどうだ？はつきり出来るだろう？」

「賛成だ。そういうの好きだぜ」

互いにフツ、と笑みを溢す。

「いくぞホロホロ」

手を空に掲げたエヴァンジェリンの上に巨大な氷級が形成される。

「負けるかよ！」

ホロホロの上にも氷の塊が作られる。それはシャーマンファイトでICE MENが作りだした冰山とは比べものにならない大きさ。

「（お前らの技借りるぜ、ICE MEN）」

一瞬だけ視線が交差し、二人は示し合わせたように同時に手を振り下ろした。

「氷神の戦鎚！！」

「オーロラ北極点！！」

二つの巨大な氷塊がぶつかり爆発し、二人を飲み込んだ。

別荘での一戦（後書き）

「オーロラ北極点」についてですが、ICE MENは砕いていたのに対してホロホロは砕いていません。その方が威力も高いでしょう。

何か質問があればどしどしと。アンケートもまだ受け付けてます。

息抜きという名の結果発表

ホ「この前……だいぶ前だな、やったアンケートの結果を発表するぜ！」

刹「司会は私、桜咲刹那とホロホロさんの二人で務めさせていただきます」

ホ「まあとりあえず悪かったな。予定よりかなり遅れちまってよ」

刹「作者の怠慢のせいですね。作者に代わり謹んでお詫び申し上げます」

ホ「まああの駄目人間のことはほっといて、アンケート結果を発表しようぜ」

刹「そうですね。ではご覧ください、こちらがアンケート結果になります」

——結果発表——

メインヒロインのみ

—— 6 票

サブヒロイン

龍宮	—	5票
エヴァ	—	3票
このか	—	3票
楓	—	1票
アキラ	—	1票
亜子	—	1票

刹「という結果になりました」

ホ「メインヒロインと龍宮の差が1票ってどうなんだよ……」

刹「作者もそこが悩みだったらしいですよ？しかし足りない脳で考えた結果、のメインヒロインのみてことになったそうです」

ホ「まああの駄作者にヒロイン二人もいて両方とも活躍させる文章力があるわけねえしな」

刹「しかし……私なんかが本当にメインヒロインなどという大役を貰っても良かったのでしょうか？私などより魅力的な方たちは大勢いるでしょうし、別に私でなくても良かったのでは……」

ホ「作者の野郎は、『ネギまの小説書くならヒロインは刹那だ！』って決めてたらしいけどな。気持ち悪かったから凍らせたけど」

刹「でも、ホ口ホ口さんはヒロインが本当に私で良いんですか？私、龍宮のようにスタイルも良くないですよ？」

ホ「むしろ中学2年であのスタイルの龍宮のほうがおかしいと思うんだけどよ……それに、俺はお前も十分お前の言う魅力的な方って

のに入ってると思うぜ?。」

刹「……そうでしょうか?。」

ホ「少なくとも俺はそう思っぜ?だから刹那は堂々と胸張ってればいいんだよ」

刹「張るほどありませんが……」

ホ「そういうことじゃねえよ」

刹「ふふっ…ありがとうございますホ口ホ口さん。少し吹っ切れました」

ホ「そうか。…ま、ちょっと長くなっちまったが、今回はここら辺で終わっとくか」

刹「はい。……では皆さん、決して良作とは呼べないものですが」

ホ「これからもこの小説を」

刹・ホ「「よろしくな（お願いします）!」!」」

息抜きという名の結果発表（後書き）

リアルがかなり立て込んでました。更新するとか言ってこの体たらく。本当に申し訳ありません。これから少しずつ更新していきますので……。

もう一つの作品も更新しなければ……！！

誕生日（前書き）

『月刊少年ホロホロ』刊行でございます。いやまあ、月刊よりは早く更新したいと思ってます。週刊は無理かもですが。

だいぶ投稿が遅くなりました。すいません、リアルが結構忙しくて。

今回は何人かキャラ崩壊してます。ご注意ください。

誕生日

「……………ん……………はっ！」

バツ、と上体を起こし周りを見回すホロホロ。そこに戦っていたときとは違う服を着たエヴァンジェリンが来た。どうやら着替えたようだ。

「漸く起きたか」

「エヴァンジェリンか……勝負はどうなった？」

「私の勝ちだ」

ニヤリとしながらエヴァンジェリンは言い放った。

「ああ！やっぱ負けた！」

「当然だ。十歳そこそこの若造にこの私が負けるものか」

「次は負けねえ！」

「ふん、返り討ちにしてくれるわ！」

ぎゃーぎゃーと言いつ合いをしている二人を少し離れた場所から龍宮、刹那、茶々丸の3人が微笑ましそうに見ていた。

「ホロホロさん、お願いがあるのですが…」

結局二人の言い合いは、龍宮の弾丸（BB弾）がホロホロの眉間にぶち込まれたことで終了した。今は、茶々丸を除く全員で食卓を囲んでいるところだ。

「ん？ふぁんだふえふな（ん？なんだ刹那）」

「迷惑を承知でお願いします。たまにでよろしいので、私に稽古をつけてくださいませんか？」

「もごもご…んぐ……ぷはあ！…んー、まあ別にいいけどよ」

「本当ですか？！」

「お、おお…」

身を乗り出す刹那に軽く引くホロホロ。まあ実際、ホロホロには断る理由など無いのだ。刹那と戦うことはホロホロ自身にも良い修行になる。

「でも、問題があんだよなあ」

「問題…ですか？」

「そつだ、場所がねえ」

問題とは、戦う場所。ホロホロが戦うとなると、必然的に戦った後には氷が残る。警備の時はどうしようもないが、出来るだけ痕跡は残したくないのだ。それにそんな状態では修行にもなりはしない。しかし、その問題の解決法は、意外なところから提示された。

「場所ならこの別荘を使うがいい」

エヴァンジェリンだった。ホロホロも刹那も、彼女からそんなことを言ってくるとは思ってなかったので、目を白黒させていた。

「えっと……いいのかエヴァンジェリン？」

「構わん。ここなら邪魔も入らぬだろうしな。存分に使うといいさ」

「何でそんなあっさり貸してくれんだ？」

メチャクチャ胡散臭い。ホロホロ、刹那、龍宮の共通の思いだった。エヴァンジェリンは間違いないさだ。それも、ドが付くほどの。そんな彼女がタダで別荘を貸してくれるとは思えなかった。

「おい、なんだその信じられないものでも見たような目は」

「いや、何か変なものでも食ったのか？」

「……死にたいらしいな」

頬をひくつかせながら魔法を発動しようとするエヴァンジェリンに慌てて謝る。

「勘違いするな。ここなら私も魔力が戻るからな。いつでも勝負ができるというだけの話だ」

顔を赤くしながら言うエヴァンジェリンを見て、要は一人仲間外れがイヤなんだな、という考えに至ったホロホロだった。

その後、適当に話をしたあとホロホロたちは別荘を後にした。

—エヴァンジェリンの別荘に行った数日後—

今日の日付は11月27日、ホロホロの17歳の誕生日である。ちなみに平日なので、ホロホロの知り合いは誰もいない。そして、誕生日を迎えたホロホロは、

「棺桶に一步近づいたな」

訳の分からないことを言いながらいつものように惰眠を貪っていた。

「まさか異世界で誕生日を迎えることになるとは思ってたぜ」

『クルル』

「まあ確かに新鮮ではあるんだけどよ…」

異世界で誕生日を迎えるという前代未聞な出来事を味わっているホロホロであるが、彼は少し物足りなさを感じていた。

「やっぱこういうのは大勢で楽しみたいつつか、こう…パーツとやりたいんだよね」

こちらの世界に来てあまりはめを外してはいないが、ホロホロは本来賑やかなことが好きな人間だ。自分にしろ自分以外にしろ、祝い事があればはめを外して騒ぎたいというのがホロホロの本音だ。しかし無い物ねだりをしてもしようがない。ホロホロは寝ることに決めた。

ピンポーン

「んあ？」

インターホンの音で目覚めたホロホロ。結構寝ていたようで、もう夕方に差し掛かるうとしていた。

「誰だ？今日は警備もねえから龍宮たちでもなさそうだし…」

基本的にホロホロの家に来る人は少ない。そのほとんどが刹那と龍宮であり、彼女たちも警備が無い日は来ることはあまり無い。

ピンポーン

「ああすぐ出るよ」

まだ眠気が残る目を擦りながらフラフラと玄関へと向かっていく。幸か不幸か、そのせいで足の小指を壁にぶつけ、痛みで一気に目が

覚めた。恐らくは不幸だろう。

「いてえ……今開けるぜ」

玄関のドアを開けた水口水口の目に映ったのは、一人で少し居心地悪気に佇んでいる刹那だった。

「…………刹那？」

珍しい、と水口水口は思う。刹那が来ること自体は珍しくもなんともないのだが、刹那一人で来たということが珍しいのだ。いつもは、龍宮とセットで水口水口の家に来るため、刹那が一人で来たことは無い。

「あの、水口水口さん」

「ん？なんだ？」

「これからお暇でしょうか？」

「……………」

暇っちゃー暇である。むしろ暇でない日の方が珍しい。……考えて虚しくなってきた。

水口水口は速攻で駄目な思考を打ち切った。

「まあ、暇だな」

「でしたら、これからお時間をいただけますか？」

「大丈夫だぜ」

「それでは、着いて来てください」

刹那に着いて行った先には、一件の食事処。看板には、『宴会、大歓迎』と書かれている。

「ホ口ホ口さん、入ってください」

「お、おお……」

刹那に促されて店の中に入り、言われるがままに店の中を進んでいく。そして、それなりに大きい座敷の部屋の前に着いた。

「ここですホ口ホ口さん」

「ここに何かあんのか？」

「ふふつ、入れば分かりますよ」

刹那の言葉に訝しみながら、ホ口ホ口は引き戸を開けた。

「お、来たねホ口ホ口君！」

そこには、ホ口ホ口と比較的仲の良い魔法関係者たちが集まってい

た。

具体的には、タカミチ、龍宮、式集院、瀬流彦、明石、神多羅木、ガンドルフィーニ、佐倉、高音といった面々である。

「…何やってんのアンタら？」

「見て分からないかい？パーティーだよ」

「そんなの見りゃ分かる。だから何でパーティーやってんだって話だ！？」

「いやいや、今日のパーティーの主役はホロホロ君だよ？」

「……………は？」

呆けたホロホロに刹那が説明を始めた。

今日がホロホロの誕生日だと覚えていたタカミチが、麻帆良への歓迎も込めて誕生日パーティーを開こうという話になったらしい。

そして、ホロホロと比較的仲の良い魔法関係者たちが集まったらしい。

「パーティー開いてくれんのは嬉しいけどよ…何でもうパーティー始まってんの？」

「待つのがめんどくさかったからだ」

「てめえらただ騒ぎたいだけだろ!？」

『……………ソナコトナイヨ?』

「目え反らすな!!」

そんなこんなでホロホロの歓迎パーティー兼、誕生日パーティーが始まった。

「ホロホロ君、もう麻帆良には慣れたかい？」

「よおタカミチさん。まあ、大体はな」

「それは良かった。パーティー、楽しんでくれよ?」

「おう!!」

勢い良くジュースを煽る。隣では、龍宮が何かを企んでいるような顔でホロホロを見ている。

「ホロホロさん、一つ提案があるんだが」

「なんだ龍宮?」

「ごによごによ、ごにより。龍宮の提案を聞いたホロホロは、即その案に乗った。」

「刹那、ちょっと」

「何ですかホ口ホ口さん？」

チヨイチヨイ、とホ口ホ口に手招きされた刹那がホ口ホ口の隣に座った。

「3人で乾杯しようぜ」そう言つてコップを刹那に差し出すホ口ホ口。龍宮の手には既にコップが握られている。

実はこの刹那のコップ、度数の高い酒が数種類混ぜられている。それがばれないように、ホ口ホ口たちの場所には、比較的臭いの強い食べ物が置かれている。

龍宮の提案は、生真面目な刹那に酒を飲ませたらどうなるか、というものだった。興味をそそられたホ口ホ口は二つ返事でこの提案に乗ったのだった。

「私たちは3人で組むのが多いからね。これから共に頑張ろうという意味を込めての乾杯だよ」

「……いいですね、そういうの。そういうことならいただきます」そう言つて刹那は酒入りコップを手に取る。

「よし、じゃあ3人同時に一気にいこうぜ。乾杯——！」

「乾杯——！」

グイッ、と勢い良くコップの中身を飲み干した3人。その直後、

「ぶはっ!？」

刹那が顔を真っ赤にして後ろに倒れこんだ。

「どうせ私は胸が小さいですよ。いえ、ひがんでなんていません、本当ですよ？ 剣を扱っている私には胸なんて必要ないんです。剣を振る邪魔になりますからね、ええ、それだけです。聞いてますかホロホロさん？」

酒を飲んで倒れてから少し経つと、刹那はむくり、と起き上がって酒に酔って真っ赤になった顔でホロホロに何やら愚痴を言い始めた。

「……聞いているさ。…だが、私は神多羅木だ。ホロホロはそっちだ」

「逃げようとしても無駄ですよホロホロさん」

本人はホロホロに言っているつもりだが、実際には魔法先生の一人である神多羅木に言っていた。

「所詮胸なんて飾りなんですよ。男の人はそれが分かっているじゃないんです。巨乳がなんですか。あんなの、ただの脂肪の塊じゃないですか。あんなのを見て鼻の下を伸ばすなんてバカじゃないんですか？ 年を取れば張りもなくなつて垂れ乳になるんです。龍宮だって将来はああなるんですよ。結局、最終的には胸が小さい者の勝利なんです。巨乳なんて滅びればいいんです。そうは思いませんか思いますよねそうですねホロホロさん」

「……これは逆セクハラにはならんのか？」

疲れきった顔で眉間に寄ったシワをほぐしながら神多羅木は呟いた。

「……刹那とは一度じっくりと話し合う必要があるそうだな」

「ちよつ、落ち着け龍宮！」

拳銃を構え始めた龍宮をホ口ホ口が必死に宥めている。

「私は落ち着いているよホ口ホ口さん。ああ、落ち着いているさ。
私はただＢＢ弾を刹那の胸に連射して刹那の胸を大きくしてやろう
と思っただけさ」

「それはただ胸が腫れただけだ！全然落ち着いてねえぞ！」

「だいたい、私が将来垂れ乳になるだって？そんな筈がないだろう。
私は生涯現役だ、垂れ乳になんてなる筈がない。むしろ刹那のほう
こそ、将来はただでさえ小さい胸がさらに小さくなって哀れな無乳
になるに違いない。なあ、そう思うだろうホ口ホ口さん思うよね思
うよな思うつて言え」

「もうやだこいつら……」

結局ホ口ホ口と神多羅木の尽力によって刹那と龍宮の戦争は回避さ
れた。

どうにかして刹那と龍宮を黙らせたホ口ホ口はテーブルに突っ伏し
ていた。とりあえず学んだことは、刹那には絶対に酒を飲ませては
ダメだということだった。

「やあ、お疲れホロホロ君。災難だったね」

倒れ伏しているホロホロににこやかな顔で酒瓶を持って近づいてきたのは魔法先生の一人であるガンドルフィーニだった。

「ガンドルフィーニさんか。見てたんなら助けるよ……」

「無理に決まっているだろう。あんな戦いには関わらないのが一番だよ」

なにやらごそごそと懷を探ってガンドルフィーニが出したのは一枚の写真。そこには一人の女の子が映っている。

「私の娘だ。どうだホロホロ君、可愛いだろう?」

「あんたには似てねえな」

「女の子なんだから、父親に似られてもちよつとね……」

しかし、そうは思っても少しは似て欲しかったのか軽いため息を洩らしている。

「でもまあ、確かに可愛いよに。将来、確実に美人になると思うぜ」

まじまじと写真を見ながら評価するホロホロにガンドルフィーニの眼鏡が光った。

「ホ口ホ口君、娘に手を出したら君といえど容赦はしないよ？」

「出さねえよ」

「こんなに可愛い娘を見て手を出そうと思わないとは、君はそれでも男か！！」

「手出して欲しいのか出して欲しくねえのかどっちだ！？」

「出したら許さん！しかし出さなかったら君は男じゃない！！」

「もう面倒臭えなあんだ！？」

完全に酔っ払ってホ口ホ口に絡み始めたガンドルフィーニを、警備で彼とよく組んでいる高音と佐倉が取り押さえた。

「酔っ払い過ぎです先生！明日も学校あるんですよ！？」

「離してくれ高音君！娘が最近反抗期なんだよ！私は、私はこの悲しみを何処にぶちまけたらいいんだ！？」

「気持ちは分かりますが抑えてください！」

二人が必死に両腕を掴んでいるが、酔っ払いは止まらない。さつきまで暴れ出しそうだったガンドルフィーニは今度は目頭を押さえて半泣きになった。

「最近、娘に話しかけても反応が冷たいんだ。…なあホ口ホ口君、

私はいたいどうしたらいい「そおい!!」ぐふっ……」

絡み酒と見せ掛けて実は泣き上戸だったというフェイントを見せたガンドルフィーニだったが、ホロホロの正拳が鳩尾に突き刺さり、苦悶の表情を浮かべながら沈黙した。

「ふう。……酔っ払いは黙らせるに限るぜ」

「結構容赦なかったですよ……。先生、大丈夫でしょうか？」

「まあ、死んでは無いと思う」

死んでいなければどうにでもなる。恐らく、起きた後で猛烈な二日酔いに悩まされることになるだろうが。

「とはいえホロホロさん、今日が誕生日なら言ってくだされれば良かったのに。何分急だったので何も用意出来ませんでしたわ」

ぐったりしているガンドルフィーニを寝かせながら高音がホロホロに言う。

「いや、自分の誕生日なんてわざわざ言い触らすもんでもねえだろう?」

「それはそうですけど……」

真面目な性格だからか、誕生日パーティーだというのにプレゼントを用意出来ていないことが悔しいらしい。

「まあ、気持ちだけ貰っとくわ」

ホ口ホ口としてはこうしてばかり騒ぎできるだけでも十分なのだ。主に騒いでいるのはホ口ホ口以外の面々だが。

「しかしまあ……カオスだよな」

部屋をぐるりと見渡したホ口ホ口はぼそりと感想を口にした。ホ口ホ口の視線の先には、飲んで食って暴れて笑って愚痴って泣いている魔法関係者たち。ホ口ホ口は笑みを浮かべながら彼らの中へ突撃していく。

「俺も混ぜろー！」

宴会は、まだまだ終わらない。

誕生日（後書き）

なんか最終話みたいな終わりがたになっちまりましたが、最終話ではありません。まだまだ続きます。

さて、少し捕捉をば。

この作品ではガンドルさんや高音さんは所謂正義バカではありません。少々正義感が強い程度になっております。まあ作者が結構好きなキャラっていうのもあるんですけどね。彼らとホロホロとの関係は良好です。ホロホロと仲が悪いのは原作では顔も出ないような魔法関係者の方たちです。

ガンドルさんたちへのアンチを期待していた読者には申し訳ない。この作品にあまりアンチを期待しないでください。アンチは嫌いではないですが、書いていると気が滅入ってくるので……。

感想待ってます。

現代の侍と古の侍（前書き）

久々のこーしん。待っててくれた人すいません。いるかは分かりませんが。では、最新話です。ゆっくりしていつてね！

現代の侍と古の侍

「刹那って酔ったらあんな感じになんだな」

「ホロホロさんと龍宮の所為じゃないですか！？うう……もうお酒なんて飲みません……」

刹那は酒に苦手意識を持つようになった。

休日、ホロホロは刹那と一緒にエヴァ宅へと向かっていた。理由は言わずもがな、修行である。

「ホロホロさん、今日は勝たせていただきます」

「その台詞、毎回言ってるよな。一度も実現してねえけど」

「い、いいじゃないですか？！心構えのようなものですよ！」

「はいはい、そういうことにしとくぜ」

元の世界では、蓮に馬鹿にされる側だったホロホロだが、こちらの世界では刹那を弄る側に回っていた。この数日、刹那をからかっているホロホロの感想は、「こいつからかうとおもしれえ」である。

「今日はいつそのこと始めから極大雷鳴剣を……いやむしろ雷光剣を……ぶつぶつ」

「（声駄々漏れだな…おもしれえから黙っとこ）」

結局、刹那の独り言はエヴァンジェリンの家に着くまで続いた。

「……………いませんね」

「いねえな」

ここ最近で見慣れたログハウスに入った二人だが、今日はいつもと違っていた。いつもならば茶々丸が迎えに出てくるのだが、今日はそれが無い。仕方なく中に入った次第である。居なければ入るな、という抗議は受け付けない。

「別荘に居るのでしょうか？」

「かもな。行くか」

「そうですね」

エヴァンジェリンの家に通い始めて数日、最初はエヴァンジェリンに対して少し怯えがあったが、今ではもうなんのそのだ。ホロホロに毒されたのかもしれない。

別荘に入ってホロホロはすぐに違和感を感じ取った。霊の気配である。エヴァンジェリンの城であるこの別荘には霊など住んでいない。彼女曰く、邪魔だったから追い出したらしい。実に彼女らしい理由だった。

『助けてくれでござるよ〜』

「ええいやかましい、黙らねば魂を氷漬けにするぞ!」

『横暴でござる!?!』

……………なんか聞こえた。ホロホロと刹那は怪訝そうに顔を見合せる。

「ホロホロさん、今は……」

「いや、頼むからちょっと待ってくれ。気のせい、気のせいだ……」

刹那にとっては初めて聞いた、ホロホロにとってはおもいつき聞き慣れた、しかし此処にはいないはずの声。ホロホロは必死に自分の心を落ち着けようと試みる。

「クールだ、クールになれホロホロ。お前ならでき……」

『見逃して欲しいでござる!この阿弥陀丸、一生の頼みでござるよ
――!?!』

「やっぱりお前かい!?!」

続いて、しかもお前もう死んでくせに一生とか無いだろうが!というホロホロのツツコミが晴れ渡った空に空しく響いた。

涙を流しながらすがり付いてくる阿弥陀丸を宥め（黙らせ）、落ちて着いたところで漸く話を始めることが出来た。

「で、なんでお前がこんなとこにいらんだよ?」

『拙者が聞きたいでござるよ。何やらハオの声が聞こえたと思えば、この幼女の家にいたのでござる』

「貴様、やはり無理矢理にでも成仏させられたらしいな…！」

『勘弁して欲しいでござる！？』

どうやら、さつき捕まっていたのはエヴァンジェリンを怒らせたか
らのようだ。阿弥陀丸からすれば恐ろしいことこの上ない。恐山ア
ンナを相手にしているようで、逆らえる気がしないのだ。

『せ、拙者のことよりも、ホロホロ殿は今までどこに居たでござる
か？』

「……ハオから聞いてないのか？」

『何も聞いてないでござるよ』

「…おいこらハオ、どうせ見てんだろ？どういうこった？」

『……ふ、特に理由は無いさ。ただ忘れていただけだ』

「余計悪いわ…！」

その後、ハオによってなぜホロホロが居なくなったのか、ここがど
ういう世界なのかということが説明された。

『なんと、そうでござったか』

『理解したか?』

『うむ。…しかし、異世界に魔法でござるか。いやはや、霊である拙者が言うのもなんでござるが、ファンタジーでござるなあ』

それを聞いたホロホロと刹那とエヴァンジェリンの顔が物凄く微妙な感じになった。お前が言うな、と言いたげな顔である。

しかし、と阿弥陀丸がホロホロをじとつ、とした非難するような顔をする。

『拙者たちがホロホロ殿を探していた間も、お主は美少女を侍らせてウハウハな生活を送っていたのでござるか?』

「誤解を招くような言い方してんじゃねえよ!」

『黒部殿という者があらながら…お主がそこまで節操なしだとは思わなかったでござる』

ホロホロの名誉の為に言っておくと、そのような事実は一切なかった。二人ともホロホロと訓練をする程度。それなりに仲が良いというのも事実ではあるが。

「おいその駄霊。誰がそのバカの女だと?桜咲はともかく、この私がこんな奴に靡くわけがないだろうが」

「わ、私だって違いますよ!!変なことを言わないでください!!」

こめかみに青筋を浮かべながら否定するエヴァンジェリンに、顔を真っ赤にして否定する刹那。予想していたとはいえそこまで否定されてはショックを受けざるを得ない。

「そこまで否定しなくてもいいだろうがよ…」

ホロホロのライフはゼロを通り越して既にマイナスになってしまった。

『クルックルッ！』

「ああ、俺の癒しはお前だけだぜコロロ…」

持ち霊に慰められるシャーマン。情けないにもほどがある。

『…しかし結局のところ、なぜ拙者だけをこちらに寄越したのでござろうか？』

とりあえずホロホロは放置の方向で決めた阿弥陀丸。これまでの付き合いで分かっている。一度拗ねたホロホロは面倒くさいのだ。

「それは私も気になるな。こんな駄霊以外にも呼ぶ奴はいくらでもいるだろうに。その辺はどうなんだシャーマンキング？」

駄霊は止めて欲しいでござるよー、という阿弥陀丸の主張エヴァンジェリンによってあえなく黙殺。二回幼女と呼んだだけでこれだ。三度目を呼んでしまえば、本当に強制成仏が待っているのではなからうか。

『まあそれは今から説明するさ。…おい、その女。桜咲といったか?』

「えっ……わ、私ですか?」

『そうだ。僕が阿弥陀丸をそっちに送ったのはお前のためだ。お前、剣士なんだろう? なら、阿弥陀丸に鍛えてもらえ』

「え、えっ……ええ?」

状況がうまく飲み込めていない刹那は狼狽するばかりである。ちなみに、ホロホロはまだ拗ねて地面に寝転がっている。

「……貴様、何を企んでいる?」

いち早く立ち直ったエヴァンジェリンが虚空を睨み付ける。しかし、並の者ならば身が竦み上がるような眼力も、ハオにとっては大したことはない。

『おいおい酷いな。こう見えても僕は一部の奴ら、僕が気に入った奴らには優しいんだぜ? そしてその桜咲は僕が気に入った。ただそれだけさ』

「信じられると思うか?」

『それを決めるのはお前じゃない、桜咲だ。……どうだ桜咲、悪い話じゃないと思うけど?』

「わ、私は……」

受けるか受けないか決めかねている刹那。悪い話ではないというのは確かだ。刹那から見た阿弥陀丸は、今まで見た剣士の中でもトップレベルのオーラを放っていた。霊であるというのに存在感が異常なのだ。

『受けることを薦めるけどね。…強くなりたいんだろ?』

この一言で刹那は落ちた。

「…その話、受けさせていただきます」

凜とした顔付きの刹那の隣で、エヴァンジェリンが面白くなさそうに舌打ちしていた。

「阿弥陀丸さん、これからどうぞよろしくお願いします」

『…うむ』

しかし阿弥陀丸の顔色は晴れない。霊だから仕方がないといえば仕方がないのだが。

「あの…やはりご迷惑でしたか?」

『いや、拙者としてもこの話を受けるのは吝かではないでござるが、一つ問題があるでござるよ』

「問題、ですか?」

刹那がきょとんと首を傾げる。普段の凜とした感じではなく、年相応の可愛らしい感じである。

エヴァンジェリンも首を傾げる。こちらは年相応とはいかないが、見た目相応の可愛らしさだ。

「何が問題なんだ？」

『拙者、靈でござるよ？どうやって稽古をつけるのでござるつか？』

「「あつ……………」」

二人とも、完全に失念していたようだ。エヴァンジェリンなど駄霊呼ばわりしておきながらこの始末。

『なんだ、その程度のことか』

『む、何か解決策があるでござるか？』

『簡単だ。そこで不貞腐れているバカを使えばいいだろう？』

三人が一ヶ所を見る。そこには、不貞腐れているバカ、もとい水口ホ口がいた。

「ん？」

皆の視線を感じて漸く再起動した水口ホ口。しかしなにやら薄ら寒い感じがする。エヴァンジェリンなどはニヤニヤしている。

「えっと、何で皆こっち見てんの？」

『ホロホロ殿、すまんでござる』

「いや、なにが？」

いきなり謝られて話についていけないホロホロ。

「すみませんホロホロさん、よろしくお願いします」

「いや、何をよろしくすんの？」

「諦めるホロホロ。まあ、ナンタラとハサミは使いようということだな」

「だれがバカだゴラァ!？」

「む、そのくらいの言葉は知っていたか」

「カッチーン!!」

「ホ、ホロホロさん、落ち着いてください」

ギヤーギヤーと喚く二人と、場を取り成そうとする刹那をよそに、ハオと阿弥陀丸は準備を進めていた。

『阿弥陀丸、人魂モードだ』

『いささか気が引けるでござるが…仕方ないでござるな』

ボムッ、と音を立てて阿弥陀丸が普段の霊の状態ではなく、人魂へ

と形を変える。

『行け、阿弥陀丸』

『御意!』

そこで漸くホロホロが意図を悟り、逃走を図ろうとするが、エヴァンジェリンの系によって体を拘束された。

「てめ、放せこの野郎!」

「諦めろと言っただろう?」

どうにかして抜け出そうとするが時すでに遅し。

『憑依合体阿弥陀丸、inホロホロ』

『ホロホロ殿、すまんでござる』

「おい、ちよっ、やめ……アッ——!?!」

ここに、異色のコラボが成り立った。

「——ふむ、やはり葉殿とは感覚が違っでござるな」

手を握ったり開いたりして、感覚を確かめる阿弥陀丸。しかし、慣れていない体といってもその体は五人の戦士のうちの一人。身体能

力は十分過ぎるほどだ。

「ほう、これが憑依合体というものか。見た目は変わらんが、纏う空気の質がまったく異なるな」

数百年生きてきて初めて見る光景に、流石のエヴァンジェリンも僅かばかりだが興奮をあらわにする。

「刹那殿、でよいでござるか？」

「あ、はい、構いません。あの…阿弥陀丸さんですよね？」

刹那はあまりの変わりぶりに動揺を隠しきれない。

「うむ、ホロホロ殿の体を借りてはいるが、今は拙者が体を使わせて（乗っ取って）いるでござる」

「そ、そうですか」

「では、早速でござるが、一度手合わせをしたいと思う。いいでござるか？」

「あ、はい。よろしくお願いします」

阿弥陀丸と刹那が五メートルほど離れた所で立っていた。互いの手には木刀。エヴァンジェリンに借りたものである。

「始める前に一つ確認を。刹那殿も魔法を使うのでござるうか？」

「いえ、私は魔法は使いません。ですが、気と呼ばれるものを用いて身体能力を強化し、また、気を使って技を発動する京都神鳴流という剣術を使います」

気を用いない技もありますが、という刹那の言葉に少し考えを巡らせる阿弥陀丸。

「…では、今回はその気とやらの使用は禁止、又は最小限に留めて欲しいでござる」

その言葉に首を傾げる刹那。

「…何故か聞いてもよろしいですか？」

「この手合わせは刹那殿自身の剣の腕を見るためのものでござる。故に他の技術を使われては見極めづらいのでござるよ」

「そういうことなら…分かりました」

「……もういいか？」

焦れたエヴァンジェリンが若干イラついた声を出す。その声に反応した二人が木刀を構えた。

「では……始め！」

エヴァンジェリンの声の直後、刹那が阿弥陀丸に斬りかかった。

「（中々の速さでござるな）」

刹那の攻撃を防いだり、受け流しながら、阿弥陀丸は刹那の力を分析していた。

「（あの細腕でここまでの力と速さ…剣筋も申し分無い）」

「はあっ！！」

「おっと（惜しむらくは太刀筋が正直すぎるというところか）」

とはいえ、阿弥陀丸もそこまでそれが悪いこととは思っていない。

後々、いくらでも修正できるのだ。今はまだ、愚直なくらいがちょうどいい。

阿弥陀丸は嬉しそうに、微かに笑みを浮かべた。

刹那は刹那で自分の剣が全て防がれていることな齒噛みしていた。

手を抜いているわけではない。むしろ全力に近い。それなのに一撃も当たらないということに刹那は圧倒的な実力差を感じていた。

「（差があるとは思っていたが、ここまでとは…！）」

「少々大振りでござるよ」

「くっ！」

阿弥陀丸の反撃を、ギリギリのところでは受け止める。

片や鬼や悪魔などの異形を退治することに特化した、通常のそれとは一線をかくす剣術。その流派の見習いほど弱くはないが、達人と呼べるほど強くもない少女。

片や戦国の世で、家族を守る為に毎日のように盗賊や落武者を我流の剣術だけでその全てを撃退し、『最強の侍』『鬼人』という異名を後世に残したほどの男。二人の実力差はある意味当然というものだった。

「（ふむ…こんなところでござるかな）刹那殿、そろそろ終わりにしようと思う。従って、神鳴流とやらの技を使って欲しい。拙者も、自らの技を出すでござる」

「はあ、はあ…分かりました」

肩で呼吸し、乱れていた息を整える。五分少々しか経っていないというのに、刹那の額には、汗が浮かんでいた。

呼吸が落ち着くのと同時に体に気を纏う刹那。刹那は心の中で、使用する技を決める。技名は『斬岩剣』。

神鳴流奥義の中でも最もポピュラーな技の一つで、修得が比較的容易な技である。斬岩剣でなくとも、威力の高い技はあるし、それら

を刹那も使うことはできる。しかし、刹那が斬岩剣を使うのには理由があった。

斬岩剣という技は、他の奥義である雷鳴剣や雷光剣のように雷属性の付与があるわけでもなく、斬魔剣のように対魔に優れている技でもない、ただ斬ることのみに特化した奥義。

斬岩と呼ばれてはいるが、使用者の実力次第では斬鉄も、それ以上の硬度のものも斬ることができるという、使用者の実力が如実に表れる技だ。刹那の実力を計るための手合わせだからこそ、刹那は自身の力量が分かりやすいこの技で挑戦することに決めた。

「（勝てるとは思っていない…しかし、一太刀くらいは！！）」

「（良い眼をしているでござる。これは将来有望でござるな）」

まっすぐに阿弥陀丸の眼を見つめてくる刹那を見て、表情には出さないが、阿弥陀丸は内心喜んでいた。

「（後世にまだこれほど良い眼をした者がいるとは、先達としては嬉しい限りでござるな）」

出来ればまだ続けたいが、焦る必要は無い。これから時間はいくらでもあるのだから。

「（この少女は間違いなく強くなる。故に今は、まだ高みに在る者として敗北を与えよう）」

加減はするが、全力を以て刹那を倒そうと決める阿弥陀丸。

刹那が強く地面を踏み締める。

「いきます!!」

「応!!」

刹那が瞬動で阿弥陀丸との距離を一瞬で詰める。

「神鳴流奥義!!」

まだ、阿弥陀丸は動かない。

「——斬岩剣!!」

「阿弥陀流!!」

そこで漸く阿弥陀丸が動いた。しかし、刹那の木刀は既に阿弥陀丸へと迫っている。

反撃は間に合わない。そう思った刹那は、決まった!と内心で勝利を確信した。

が、それは次の瞬間に覆された。

「——後光刃」

阿弥陀丸の一撃を顎に受けて吹き飛ばされる。意識を失う直前、刹

それは、阿弥陀丸の頬に一筋の血が流れているを見た。

それは確かに彼女が付けた傷。自分の一撃が通ったのを理解して、満足そうな笑みを浮かべながら刹那は意識を手放した。

現代の侍と古の侍（後書き）

まー、色々とご都合主義なのはご勘弁ください。作者の文才の無さとスラスラの脳味噌が悪いんです。

阿弥陀丸を刹那の持ち霊にしようかなーとか思ってしまった。ただでさえ手一杯なのに、さらに収集がつかなくなるわ!?

ってなわけで、感想などをお待ちしています。割と切に。作者の執筆意欲は感想の数に比例する!.....らしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1765s/>

麻帆良に来たシャーマン

2011年9月23日13時54分発行